

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 4番目の劇：エウリピデス『アルケステイス』考

著者	丹下 和彦
雑誌名	研究論集
巻	87
ページ	135-150
発行年	2008-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1443/00006214/">http://id.nii.ac.jp/1443/00006214/</a>

## 4 番目の劇

——エウリピデス『アルケスティス』考——

丹 下 和 彦

### 要 旨

ギリシア悲劇の競演の最終審査は、予選通過者3人がそれぞれ一日に4篇の劇を上演して競われるが、その4番目に上演される劇はサテュロス劇であるのが通例である。サテュロス劇とは、山野の精サテュロスが合唱隊に扮して幾分品の悪い下ネタで笑いを取る短い笑劇である。ここに取り上げる『アルケスティス』は、サテュロスは登場しないものの4番目に上演された劇であるゆえに、古来サテュロス劇の代替作品と見なされてきた。

本稿は、そのサテュロス劇の要素を劇中に探りながら、同時に作者エウリピデスが唯一残存するサテュロス劇『キュクロプス』で見せた笑劇の背後の真摯な人間観、また鋭い時代意識が本編にも見られるかどうか、主要人物アルケスティス、アドメトスの死生観をもとに考察する。

キーワード：サテュロス劇、死の回避、死の選択、女性の地位

### はじめに

エウリピデスの『アルケスティス』は前438年アテナイのディオニュソス劇場で、『クレタの女』(断片)、『プソピスのアルクマイオン』(断片)、『テレポス』(断片)とともに4番目の劇として上演された。4番目というのは作者に一日4作割り当てられた上演劇の4番目、すなわち最後の劇として上演されたということである。4番目に上演される劇はサテュロス劇であるのが通例である。サテュロス劇とは、端的に言えば、山野の精であるサテュロスが劇の合唱隊を務める短い笑劇のことである。『アルケスティス』は比較的短い劇(全1163行)ではあるが、それでも現存する唯一のサテュロス劇、エウリピデスの『キュクロプス』(全709行)に比べれば長い。そして何よりもサテュロスが登場しない。それゆえにサテュロス劇とはちょっと言い難いところがある<sup>1)</sup>。では笑劇であるかどうか。サテュロス劇は、合唱隊を構成するサテュロスたちが劇中でしばしば卑猥な言動をし、観客に笑いとくすぐりを提供するところから同時上演の他の3作品とは異質のものに分類されがちである。さりとて全篇これすべて笑いに満ちた

面白ろおかしい軽演劇というわけではない。完璧な形で残された唯一のサテュロス劇、エウリピデスの『キュクロプス』を見てもわかるように、そこにはなかなかシリアスな問題が提起されている。すなわち『キュクロプス』では、ギリシアの伝統的価値観である「知」と「法」が辺境の住人キュクロプスによって揶揄と批判の対象になっている、そういう一面がある。

朝早くから不倫や親殺しや子殺しといった人間が犯す重い罪をテーマとする悲劇を3篇も続けて見物させられれば、観客もいい加減疲れてくる。4番目の劇はその疲れを癒すもの、一種の口直しの役割を担っていたと考えられる。サテュロス劇は、合唱隊を構成するサテュロスたちのいささか品のない悪ふざけでその務めを果たした。ではサテュロス劇ではない4番目の劇、たとえばこの『アルケスティス』ではどのようにしてその4番目の劇の役割を果たしているのだろうか。その点を探ること、さらにはこの『アルケスティス』にも『キュクロプス』のように笑劇的要素以外に何かシリアスな問題意識が盛り込まれているのかどうか、これを確かめること、これが小論の目的である。

## 1. 死神の訪問

まずこの劇はどういう話なのか、その内容を素材となった神話伝承によって見ておこう。

ギリシア中部テッサリア地方の町ペライの王アドメトスに死期が迫る。しかしアポロン神の周旋によって運命の女神たちモイライから身代りに死んでくれる者を見つければ命は助かることが保証される。アドメトスは老父母に身代りを頼むが拒絶される。代わって妻のアルケスティスが身代りを申し出て死ぬ。その葬儀の最中にヘラクレスが来訪する。アドメトスは妻の死を隠してこれを手厚くもてなす。後で事情を知ったヘラクレスはもてなしの返礼に死神と格闘してアルケスティスを冥界から連れ戻し、アドメトスの許へ届ける。

以上が粗筋である。この話はアポロドロスの『ギリシア神話』に載っている。繰り返しになるが引いておく。

〈略〉アドメトスがペライの王であった時にペリアスの娘アルケスティスの愛を求めている間に、アポロンは奴僕となって彼に仕えた。ペリアスが戦車に獅子と猪をつないだ者に娘を与えると約束したので、アポロンがつないで彼に与えた。そこでアドメトスはペリアスの所へ持って行ってアルケスティスを得た。結婚式で犠牲を捧げる時にアルテミスを忘れた。そのために閨房を開いてみると部屋がとぐろを巻いた蛇でみたされているのを見出した。アポロンは彼に女神を宥めるようにと言った。そして運命の女神達から次の如きことを乞いけてくれた。即ちアドメトスが死なんとした時に〔父母または妻の〕誰か彼のために喜んで死のうとする者があった場合には、彼は死より解放せられるであろうと。彼の死ぬ日が来た

時に、父も母も彼のために死のうとしてくれなかったが、アルケスティスが彼の身代りとなって死んだ。しかし乙女（<sup>コレ</sup>ペルセポネのこと）は彼女を地上に送り返した。一説によればヘラクレスが冥府王と闘って彼女を（<sup>ハデス</sup>アドメトスの所へ連れ戻したということである。）（アポロドロス『ギリシア神話』1, 9, 14～15, 高津春繁訳、岩波文庫。ただし固有名詞の長音記号は引用者の責任において省かせていただいた。）

アポロン神がアドメトスの屋敷で奴隷奉公したことについてはまた別の話がある。アポロンの子アスクレピオスがその医術を駆使して死者を次々に生き返らせるのを見たゼウス大神は、人間の生き死にという天下の常道が覆され己の権威が侵害されるのを恐れ、雷火を投じてこれを殺した。息子を殺されたアポロンはその報復に、雷火をゼウスに供給したキュクロプスらを殺した。するとその罰にゼウスがアポロンを人間界のアドメトスの許へと送り込み、1年間の奴隷奉公を命じたというのである。

この間アドメトスはアポロンをたいへん親切にもてなしたということになっている。上のアポロドロスにあったように、アドメトスの嫁取りに尽力したのもその返礼という側面もあったであろう。作品『アルケスティス』の中でも、彼はヘラクレスにその無類の客好きぶりを発揮するが、これはすでに神話伝承の段階で彼に所与の性格として固まっていたものと考えてよいと思われる。

以上のような物語を素材にしてエウリピデスは『アルケスティス』を書いた。だがこれを劇化したのは彼が最初ではない。先輩作家のプリュニコス（前6世紀後半－前5世紀前半）が同名の劇『アルケスティス』を書いたことがわかっている。ただしそれが悲劇であったのか、それともサテュロス劇であったのかは不明である。極小断片しか残存しないからである。その断片とは以下のものである。

四肢をふるわせている相手の体を、情容赦なく痛めつける。

（ナウク断片、プリュニコス2<sup>2)</sup>）

死神との格闘にヘラクレスが勝利した様子の描写と想定される。アイスキュロス、ソポクレスにはこの素材を扱った劇はない。エウリピデスは先行のこのプリュニコスの作品は知っていたはずである。素材が神話伝承に限定されているギリシア悲劇は、同一素材を扱った複数の作品の存在が可能である<sup>3)</sup>。そうした先後二つの作品を取り上げて影響関係を探ることは興味深い仕事となるが、『アルケスティス』に関してはプリュニコスのそれを欠くために両者の比較検討は断念せざるを得ない。考察の向かうところはエウリピデスの『アルケスティス』を単独作品としてどう評価するかということになる。エウリピデスはこの伝承をどのように作品化し

ようとしたのか。そしてなぜ4番目の劇としたのか。これをわたしたちは先行作品との比較なしに探究しなければならない。

素材となった伝承の中で注目されるのはアドメトスが突然死に見舞われ、そのことが彼の周囲に小さからぬ波紋を巻き起こすことである。なぜアドメトスに死神が訪れて来たのか、その理由は明らかにされていない<sup>4)</sup>。人間であれば誰でもいつでも死に襲われる可能性はある。理由は不治の疾患でも不慮の事故でもよい。だがそれが明らかにされていない。ただアドメトスの災難が通常とちがうところは、自分の身代りに死ぬ者を見つければ彼のほうは死を免れることになっていることである。そのことが事態を錯綜させる。事は死の問題だけではない。生の問題にまで及んでくるからである。そしてアドメトス本人だけでなく、彼の周囲の人間たちの赤裸々な姿を容赦なく浮き彫りにするからである。

死神の訪問はアドメトスを奔らせる。彼は死ぬことを厭い、運命の女神たちの約束を頼みに身代りに死んでくれる者を求め、まず父母の許を訪ねる。しかし両親は息子の身代りとなって死ぬことを拒絶する。ところでアドメトスはなぜ身代りの死を求めたのか。それは単に死への恐怖のためだけだったのだろうか。あるいは他に生き延びるための理由があるのか。運命の女神たちは、もし身代りに死んでくれる者を見つければ死なないですむことを約束してくれている。今の場合この運命の女神らの約束を唯々諾々と受けることが、アドメトスにとって果たして最良の行為であったのかどうか。死を運命として甘受し、従容として死に就くことも選択肢の一つとなり得たはずではないか。このことについてはまた後で触れる。劇は身代りの死を承知した妻アルケスティスの臨終の場から始まる（第1、第2エペイソディオン）。

## 2. 死の選択

アルケスティスの臨終の様子はまず館内から出て来た侍女の口から告げられ（第1エペイソディオン）、次いで舞台上に姿を現わしたアルケスティス、そして夫のアドメトスおよび二人の子供たちによって愁嘆場が演じられる（第2エペイソディオン）。

第1エペイソディオンで侍女はまず「あの方より卓れた女性など、どうして存在しえましょうか。／妻の身で夫の身の上を気づかう心根を示すのに／身代りの死を望む以上の方法がほかにあるでしょうか」（153-55行）とアルケスティスの行為を称讃する。身代りの死は犠牲死である。犠牲死の例はほかにもある。イピゲネイアはアウリスでトロイア遠征軍の風待ちのために犠牲に供される（エウリピデス『アウリスのイピゲネイア』）。ポリュクセネはアキレウスの亡霊の慰霊のために（これも帰国するギリシア軍の風待ちのためであった）犠牲に供される（エウリピデス『ヘカベ』）。この2例の犠牲死にはちゃんとした理由がある。ギリシア軍という一つの共同体全体の動向を決定するいわば公的な理由である。アルケスティスの死にはそう

した理由はない。あくまで愛する夫の身代りという私的な理由による犠牲死である。尤もアドメトスはペライの国王であるから、その身代りになることは国の身代りになるとも言えるわけで、強いて公的な理由付けをすることも不可能ではないかもしれない。しかしその点はアルケスティスによっても、またアドメトスによっても一言も言及されていない。上で見たように第三者（侍女）の受け止め方もその域を出るものではない。アルケスティスの死は専ら愛する夫を助けるための身代りの死、いわば私的な犠牲死であると考えてよい。

それでいながらしかし死にゆくアルケスティスの最大の関心事は愛する夫のことではなく、遺される子供たちの将来である。臨終の場の彼女の言葉はほとんどそのことに費される。彼女は「わが母なき身の子らをどうかお護りくださいませ。／男の子には愛しき妻女を、娘には立派な背の君を娶めせてやってくださいませ」（165－166行）と、ヘスティア（竈）の女神に祈りを捧げる。妻よりも母としての姿がここでは鮮明である。このあと彼女は自らの「処女の純潔を失った」思い出の寝床に別れを告げ、集まってきた使用人たち全員と涙ながらに親しく最後の挨拶を交わす。夫アドメトスには、ではどう対処したか。彼女のほうから言葉を掛けることはしない（侍女の報告ではそうである）。逆に妻の死を嘆くアドメトスの姿が以下のように描写されている、「（アドメトスさまは）愛しい奥方様を手に抱きしめて泣いておられます。／捨てて行かないでくれと訴えておいでです」（201－202行）。死の定めを代わってもらった者に死んでくれるなど哀願するこの矛盾。このとき侍女にはおそらく皮肉の意図はない。私見ではアルケスティスの意を汲んだ作者がこう言わせているのである。ここでアドメトスはほとんど道化と化している。

第2 エペイソディオンは夫婦の最後の別れの間を追う。先の侍女の報告を証するかのように、アドメトスは死にゆくアルケスティスに泣きすがる、「身を起こしてくれ。ああ不憫な奴、わたしを捨てて行かないでくれ」（250行）。アルケスティスの目にはすでに冥界の渡守カロンの姿が見えている。意識が薄れてゆく。「冥府はもうま近かです。夜のような闇が／ゆっくりと目にかぶさってきます」（268－269行）。これを聞いたアドメトスは言う、「神かけてお願いだ。わたしを置いて行かないでくれ。／この子らにもかけてお願いする、なあ、母親の無い子にしようというのか、／起きてくれ、頑張るのだ、／おまえが死ねばわたしも終わりだ。／わたしが生きるも死ぬもおまえ次第なのだ。／おまえの愛ほど尊いものはないと思っているのだから」（275－279行）。

これに対しアルケスティスはこと切れる前に言っておきたいと、こう遺言する。「わたくしあなたを誰よりも大事な方と思い／わが命に代えてもこの世の光を仰げるようにとの心遣いから／死んで参ります。〔略〕まだ若い身空を／惜しいとは思いません。たっぷり楽しませていただきましたから。／それなのにあなたのご両親はあなたを見棄ててしまわれた。／あの方たちはもうとっくに人生を終えられてもよい年代になっておられるのに、／子供を助け己は死ん

で名を得られてもよい御年令なのに、／「略」さあ、こんどはそのお返しをどうかお忘れなく。／「略」この子らがいずれはこの家の主人となれるようにしてやってくださいませ。／再婚してこの子らに継母を迎えるようなことはなさらないでくださいませ。／「略」ご気嫌よう、みなお健やかにね。旦那さま、／あなたは立派な妻をおもちだったと、子供たちよ、／おまえたちもね、この母から生まれたことを誇りに思ってくれてよいのですよ」(282-325行)。

アルケスティスは自分の死は夫への愛ゆえであること、これまでは短いながら幸せな生活だったこと、ただ子供の身代りにならなかった義理の両親の振舞いには不満であること、残す子供たちの行く末を案じて夫の再婚は望まぬこと、わが死は夫にも子供にも誇りに思ってもらえると確信していること、こういったことを彼女は言い残す。

これに対してアドメトスは健気な妻の行為を感謝しつつもその死を嘆き、以後は長く喪に服すと述べ、そして再婚はしないと約束する。「ああ辛い、そなたに取り残されてわたしはどうしたらよいのだ」(380行)。「おお、神よ、どれほどの連れ合いをあなたはわたしから奪い取るのか」(383行)。「妻よ、あとに残して行かれるくらいなら、わたしも死ぬしかない」(386行)。アドメトスの嘆きも甲斐なくアルケスティスは瞑目する<sup>5)</sup>。子供たちの嘆きの声がそれに続く。そして第2 エペイソディオンが終わる。

アルケスティスはなぜ死んだのか。夫への愛のためだった、とまずは解してよい。夫を生き続けさせるために、その身代りとなって死んだのである。夫の犠牲になって死んだのである。彼女自らそう言っている。先の引用の冒頭部分(282-284行)を今一度参照されたい。しかしすでに触れたように、この犠牲死は格別の公的な理由があつてのことではない。そういうふうには書かれていない。私的な愛のため、愛する夫にとにかく生きていてもらうための死である。そうとしか言いようがない。そしてその死はけっして無駄な死ではない。世間から称讃されてしかるべき死である。すくなくともアルケスティス自身そう確信している(上の引用の323-325行を参照)。公共のためではなくても犠牲死は成り立つのである。アルケスティスの場合、それを愛が可能にした。それは崇高な死であると、のちに称讃の対象とされた。彼女の確信は証明されたのである。プラトンは彼女の死を愛の殉死であるとしている。「さらにはまた殉死であるが、ただ恋をしている者だけがこの覚悟ができるのであって、このことは男子に限らず、じつに女子もまた能くするのである。そしてその点に関してはまたペリアスの娘アルケスティスが、このぼく(パイドロス)の主張を支える充分な証しをギリシアの人々に提供している」(『饗宴』179bc)<sup>6)</sup>。

しかしこの愛の死は、殉死という言葉から想像されがちな完全なる無償の愛、無償の死ではない、ということは言うておかねばならない。アルケスティスは義理の両親の態度を非難した上に、自らの死の見返りを要求している、「さあ、今度はそのお返しをどうぞお忘れなく」(299行)と。それは残された子供たちのため(加えて自分のためもあろう)の再婚禁止要求

である。彼女は自らの死の代わりに、この実利と誉れある死という世間一般からの評価をも期待しているのである。

しかしそれにしてもアルケスティスはなぜ身代りの死を承知したのか。ここで本篇上演時のアテナイにおける女性の置かれた社会的位置、そして社会全般の通念を考慮してもよいかもしれない。アリストテレスは動物にたとえながらではあるが、女性は男性よりも本質的に劣る存在、そして男性から支配される存在であるとしている（『政治学』1254 b13-14）<sup>7)</sup>。一家の家長のために妻女が犠牲となるのはごく当り前のことであるとする時代風潮を、本篇執筆と上演の背景に考えても強ち荒唐無稽とも言えないのではないか。

それでもしかしアルケスティスは、やはり純粋に夫への愛情から身代りの死を選択したのである。先の引用の冒頭部分（282-284行）を再度思い起こしていただきたい。彼女自身がそう言っている以上それを信じないわけにはいかない。人の犠牲となって死ぬことの理由に公的も私的もないのかもしれない。公的な理念であれ私的な愛であれ、そこに共通するのはある種の一途さであろう。それがアルケスティスにはあったということであろう。一途さも純度が極まれば公も私もないのである。ではアルケスティスにとっての一途さとはどんなものであったのだろうか。

### 3. 死の回避

妻アルケスティスに死なせた夫アドメトスは強い落胆の様子を示す。アルケスティスという良妻賢母を死なせたことが今さらながら悔まれる。わたしたちはこのアドメトスの落胆、後悔、そして嘆きの情には共感を覚えずにはいられないが、しかしその一方で一抹の違和感も感じざるを得ない。アルケスティスの死は彼の身代りの死という事実があるからである。彼は「おまえが死ねば、わたしも終わりだ」（278行）と言う。それならなぜアルケスティスを死なせるのか。また彼は言う、「おお、神よ、どれほどの連れ合いをあなたはわたしから奪い取るのか」（383行）と。奪い取るのは神ではない、おまえがそう仕向けたのではないか、と言いたいところである。身代りの死によって延命の余沢を受けたアドメトスは、アルケスティスの死という現実を甘受し黙って耐えるしかないはずである。第三者のようにそれを大っぴらに嘆く権利はないのではないか。それほど妻の命が貴重なものであるならば、身代りの死を求めなければよかったはずではないか。しかし彼はそうした。彼は贅語を費しているにすぎないとしか理解できないのである。

見方を変えればアドメトスの一連の言葉は妻への愛情表明であると解される。彼のほうも妻に負けず相手を受していたのである。しかし彼は妻から身代りの死を申し出られたとき、それを押し止め、逆に愛する妻を生かすべく定めのとりの自らの死を甘受することはしなかった。



自分が生き残る途を選んだのである。愛情の純度を競う争いにおいては妻に引けを取ったと言わざるを得ない。愛の献身度が競い合われるとき、しかもそこに死が介在するとき、勝者は死して英雄となり、敗者は生き残って道化となる。生き残ったアドメトスの言辞様態には、どう言い繕おうとも道化の影がついてまわる。

それだけではない。周囲からの非難の声も喧しい。「見ろ、生き恥を晒している男だ。死ぬ勇気がなく／臆病風に吹かれて妻を身代りにし、／死を免れた奴だ。いったいあれが男かね。／自分は死にたくないくせに、親を恨んでいるのだ」(955-959行)という噂が立つ。立つのではないかと、彼自身自覚し懸念している。アドメトスは妻のみならず自己の名誉まで失うことになる。そこまでして死を回避し生きたいと願う理由は何か。本能的な死への恐怖は誰にでもある。彼にももちろんあろう。それだけで身代りの死を妻に押しつけるのであれば、妻の死を大袈裟に嘆いてみせぬことだ。沈黙して自らの怯懦を自らに責めておればよいのである。

それとも身代りの死を妻に押しつけてまで生き延びなければならぬだけの理由が、他にあったのだろうか。妻の口からは、夫への純粋な愛情以外に身代りになって死ぬ理由は語られない。たとえば王としてのアドメトスを生存させる必要があるような緊急の事態が発生して、そのために身代りの死を選んだというようなことが、言外にでも仄めかされるようなことはない。アドメトスはペライという一国の主たる地位にあるから、統治者として共同体の運営責任を負っている。ペライにとってはその死は一個人の死以上の重みをもつ。その公人としての責任問題は、しかしいまの場合一切看過されている。アルケスティスはもちろん、アドメトス自身すらそれを持ち出すことはしていない。素材となった伝承にも、そうした問題は影を落していない。アドメトスの死はあくまで個人としての死である。

第4 エペイソディオンのペレス、アドメトス父子の論争の場(アゴン)を覗いてみてもそうである。この父子はペライという共同体の前王と現王といういわば公的立場にある二人であるが、現王に降って湧いた死の問題は一家庭の親子の私的な問題へと限定されて検討される。息子に迫った死を親は身代りとなって死んでやれるか、という問題である。アドメトスがペレスに身代りの死を要求するのは、老い先短い親は若い子供の身代りに死んで当然とするいかにも人間臭い世代論的理由からである。そこではペライという国の存続をめぐる議論が交わされることはない。アドメトスは言う、「それほどの歳をしていて、寿命も尽きかけようというのに、／自分の子供の身代りに死のうという気持ちもなければ、／度胸もなかったのです」(643-645行)。ペレスは応じる、「おまえだって陽の光を見ていれば嬉しいであろう。では、父親は嬉しくないというのか」(691行)と。そしてこう畳みかける。「賢いおまえは死なずにすむ方法を見つけた。／寄り添う妻をおまえのために死んでくれるように／しょっちゅう説きつけていればよかったのだ。それでいて死ぬのを断った／身内を非難するのか、おのれはずるい真似をしておきながら。／黙ってよく考えろ。おまえにおのれの命が愛しいなら、／誰もがそんな

のだ」(699-704行)。これはむき出しのエゴイズムの応酬である。そしてこの応酬に結着はない。アドメトスは父ペレスに「試練に出会って、あなたの人間性が明らかになりました」(640行)と言うが、ペレスこそまたアドメトスに向けて言いたいせりふであろう。

こうしてみるとアドメトスが死を回避するのは格別な公的理由のゆえではなくて、まったくの私的理由、単に自分の命を惜しむがゆえのことであることになる。その彼が身代りに死んでくれなかった父親を罵倒し、また身代りに死んでくれた妻を異様なまでに愛惜するのは滑稽ですらある。自らの言葉と行動の矛盾に気づかず、その場限りの勝手な自論を得々として展開するアドメトスの姿は、すでに喜劇の領域に入りかけているものである。作者エウリピデスは素朴な民話の素材にリアルな視点を持ち込んで、アドメトスという人間の生理解剖をしてみたことになる。

ただ一つ、これはアドメトスへの弁護になるかどうかわからぬが、付言しておきたい。第4エペイソディオン冒頭、死せるアルケスティスの出棺前に姿を見せたペレスは次のように言う。「彼女の亡骸は十分に敬われてしかるべきだ。／おまえの身代りに死んだのだからな。なあ、息子よ、／それにわしを子無しの身にもすることもせず、またおまえを取られたまま／老いの辛さに身を滅ぼすこともせずにくむようにしてくれた。／そしてすべての女子に彼女はこの上なく誉れある生き方を／模範としてみせたのだ。この高貴なる行動を進んでやってみせたのだ。／むむ、この男を救い、倒れたわれらを／起こしてくれた女子よ、ご機嫌よう、冥府の館にあっても／つつがなくあれ。このような結婚なら人の役に立つといえる。／でなきゃ結婚などする必要はない」(619-628行)。

これは夫への愛情から夫の身代りになって死に、結果的に一家を救うことになった健気な妻の英雄的行為へのオマージュであろうか。表向きはそうである。しかしここで言われている健気な妻とは、夫のため、また家のために進んで死んでくれる妻、つまり家父長制の確立した男性中心社会の構成員ペレスの目から見た健気な妻女ということである<sup>8)</sup>。彼にとって結婚とはなによりも家の存続に利するものでなければならない。妻、嫁はまずそのための道具であるべきなのである。前にも触れたように、本篇上演当時のアテナイ社会は男性中心の共同体、いわばメンズクラブのごときものであった。ただこの時代の夫婦関係がすべてこのような現代から見ればいびつな女性観を反映したものであったとするのは早計であろう。たとえ形の上では男尊女卑的な夫婦関係であっても、中にはアドメトスとアルケスティスのそのような細やかな愛情の通いあうカップルもあったにちがいないのである。

一方でしかし、こうしたカップルでも上述のようないびつな女性観が知らずしらずのうちに男性(夫)の心を冒していた可能性はある。おそらくアドメトスは心中にさほどの葛藤もなく身代りの死を妻アルケスティスに頼んだのである。彼のほうから頼まなかったとしても、妻からの申し出を安易に受けてしまったのである。その行為の根底には彼の人間性が横たわってい

ることは確かだが、同時に時代の社会通念が彼の行為の後押しをしたということもあったのである。作者エウリピデスが本篇において提示したのは“悩まぬアドメトス”であった。この点でアドメトスは悲劇的人物であることを止めたのである。

#### 4. ヘラクレス登場

アルケスティスの死で屋敷じゅうが大騒動している最中に、ヘラクレスがアドメトスを訪ねて来る（第3エペイソディオン）。ヘラクレスはティリュース王ディオメデスが飼育している人肉を喰らう馬を奪い取りに行く途中、旧知のアドメトスの館に立ち寄ったのである。アドメトスは妻アルケスティスの死を隠してヘラクレスを迎え入れ、贅を尽くした接待をする。「もし客としてやってきた人間を屋敷から、また町から／追い払ったとしてみなさい。あんたはそれでわたしを賞めてくれたかな。／答えはノーだ。わたしの不幸がいま以上に小さくなることは／決してないのだから。しかもわたしは不人情な男ということになる。／そしてこれまでの禍に別の禍が加わることになろうよ。／わが家は客に冷たいという噂が広まるだろうね。／この先いつかアルゴスのあの乾いた土地を訪れてごらんよ、／そのときはこちらが申し分ない迎え方をしてもらえるのだぞ」（553-560行）。

またこうも言う、「彼（ヘラクレス）は決して家に上がろうとはすまいよ、／もしわたしの悲しみをちらりとでも知れば。／そんなことをすればきっとわたしは分別のない人間だと思われてしまう。／人からはとても賞めてもらえまい。客を追い立てるような／無礼な真似はわが家の流儀には合わないのだ」（563-567行）と。

旅の客を家に迎えて暖かくもてなすこと（これをピロクセニアという）は、古代のギリシアでは重要な生活習慣あるいは一個の社会通念として広く認知されていたことであった。すでにホメロスは漂泊のオデュッセウスに、辺境の地の蛮族キュクロプスを相手に「ところでわれらはこの地にたどり着き、あるいはおぬしから客人としてもてなしてもらえるかも知れぬ、そうでなくともなにか客の受けて然るべき贈物を頂戴できるかも知れぬと、それを頼りにおぬしの膝にすがっているわけだ」（『オデュッセイア』第9歌266-268行、松平千秋訳、岩波文庫）と言わせている。ただ残念ながら、これは蛮族相手には通じなかった。逆にオデュッセウスは洞穴に閉じ込められ、仲間を何人が喰われるという惨憺たる目に遭わされた。アドメトスはキュクロプスとはちがう。客のヘラクレスを、取り込み中でありながら快くもてなした。彼はピロクセニアのまさに体现者として描かれている。この点で彼はギリシア社会の真なる一員としての資格を有し、かつその責任を果すのである。

問題はヘラクレスが桁はずれの乱暴な客であったことである。死者を出した家には不似合いの酩酊と放歌高吟で接待側を悩ます。ヘラクレスが鯨飲馬食の徒であることは、古来しばしば

言及されているところである<sup>9)</sup>。ギリシアの神話伝承上の英雄たちの中で、ヘラクレスだけはその破天荒な食欲のゆえに喜劇的性格を賦与されている英雄と言ってもよい。飲食はそれ自体が目的となったとき、笑いの対象となる。酩酊したヘラクレスは、アドメトス家の召使相手に彼独特の処世観を一席ぶつ、「盃一杯ぐいとやれば、おまえさん、いまのその／陰々滅々たる思いとはおさらばできようぜ。／人間なら人の世のことを考えてしかるべきだ。／しかめ面をしてむつかしいことを考えている連中はみんな／せっかくの人生が人生になっとらん。心配の種になっとるんだ。／これほんとうと思ってもらって結構」(797-802行)と。これに似たせりふを聞いたことがある。こういうのである。「日ごと飲んで食ってくよくよせぬ——／これが賢者にとって神というものだ。／法律など発明して／人間の生活をややこしくした奴らには／せいぜい泣き面でもかいてもらおうか」(エウリピデス『キュクロプス』336-340行)。

前者は訪問先の振る舞い酒に酩酊したあげくの放言、後者は訪問客から接待を求められて、そういった社会通念が及ばない文化の埒外に住まう者からの皮肉たっぷりな応答である。キュクロプスは法治社会の埒外にいるという意味で異端アウトローである。ヘラクレスは単なる異端アウトローではない。異端と見えつつまた正統派でもある。ただ彼は法（この世の決まり）の制約を受けないところがある。彼は神の子であり、常人を越える身体的能力を備えた英雄豪傑であり、現世と冥界との境界線も時に応じて自在に越えることができる。その意味でアウトロー的であるとも言ってもよいのである。ヘラクレス像のもつこの脱正統性は、キュクロプスの異端性と同様に非悲劇なものに繋がる場所がある<sup>10)</sup>。自由放埒で享楽主義的な相貌だけが、彼を喜劇の人物としているのではない。

さて事の真相を知らされたヘラクレスはアルケスティス救出に向かう。「わしはたったいま身罷った女性アルケスティスを救い出し、／彼女をこの家にふたたび戻し置き、アドメトスへの借りを／返さねばならんのだからな」(840-842行)。またこう言う、「見上げた男だ。それを隠してまでわしへの気遣いを見せてくれたのだ」(857行)と。つまりヘラクレスはアドメトスが妻を失った喪の最中であったにもかかわらず、それを隠して自分を歓待してくれたその心意気を感じ入り、アルケスティス救出に赴くのである。それは結果的に歓待ピロクセニアへの返礼となる。事の真相を知って酩酊からすっかり覚醒したヘラクレスは、今度はアドメトスの示した心意気に心地よく酔うのである。単純と嗤うなかれ、これが世に言うピロクセニア、メンズクラブの理想的交際法なのである。いまの彼はアウトローではない。人間社会の取り決めの中にすっかり嵌り込んでいる。それはともかく、死神との格闘に勇躍出立するヘラクレスの背には、観客席から万雷の拍手が送られたことであろう。

ヘラクレスと入れ違いに野辺送りから戻って来たアドメトスは妻のいない己の館を眺め、いまさらながら失ったものの大きさに思いを致す。妻は名誉に包まれて多くの悩みとおさらばした。「ところがわたしのほうは、命無きところをうまくすり抜けた方がいいが／この先ずっと禍

多い生を過ごすのだ。やっと気がついた」(939-940行)。やっと気がついたという述懐は、おそらく偽りではない。言葉自体は真摯なものであろう。だが反省することは誰にでもできる。反省することですべてが終わるわけではない。行く末を悲観しながら、しかし彼はなお生きる途を選ぶ。生きることこそすべてだと言われれば二の句の継げようがないが、これほどの空虚感を抱えてなにゆえになお彼は生きようとするのであろうか。国政の長としての責任感ゆえであらうか。幼き子らのためであらうか。愛する妻を死なせてまで生存を志向する明確な理由が語られないために、いくら反省しても泣いてみせてもその姿にはどこか道化の影が差すのである。

この彼の許へふたたびヘラクレスが姿を見せる。今度は婦人と二人連れである。そしてその婦人を、彼がトラキアの人肉喰らいの馬を曳いて戻ってくるまでのあいだ、アドメトス家で預かってほしいと申し入れる。アドメトスはアルケスティスに彼女の死後身边には一切女性は近づけぬ、再婚はせぬと誓った手前、これを拒否する。ヘラクレスはさまざまに理由をつけてアドメトスを説得しようとする。結局アドメトスは根負けしてしぶしぶ承知する。これはアドメトスの心根を試す試練、いや一種の試験である。顔をヴェールで隠し、沈黙したままヘラクレスの脇に立つアルケスティスは、それと悟られぬままにアドメトスの誓言に偽りがないかどうか試すかたちになる。アドメトスはこの試練をなんとか乗り越える。オルフェウスは試練に失敗して妻を失ったが、アドメトスは合格して妻を取り戻すのである。かくしてヘラクレスはアドメトスから受けた歓待ピロクセニアに見事報いることになる。互いの客付き合いを良好に保持するというメンズクラブの規約は、かくして厳格に守られ全うされたのである。

## 5. 沈黙の意味

冥界から生還したアルケスティスは、穢れを祓うためになお3日間沈黙したままでいなければならない<sup>11)</sup>。再会した夫婦は、この奇蹟の生還を互いに声を出して喜びあうことはまだできないのである。わたしたちにとっても3日という時間は長い。彼女の声の聞けぬままに劇は終わり、劇場を後にすることになる。これはなかなか意地の悪い終わり方である。3日後の彼女の第一声がどんなものであるか、さまざまに想像させられるからである。そもそも当該のアドメトスは、その第一声をどんなものと想定していようか。いや彼は何のわだかまりもなく虚心に彼女の声の聞くことができるだろうか。そしてこれまでと変わりなく、今後も彼女と幸福に(!)暮していけるだろうか。

劇の末尾でアドメトスは歓喜の情をこう歌いあげる、「さて市民らに、また周辺の者らすべてにも申しつけよう、／この目出たい出来事に歌舞いを立ち上げ、／祈りを込めて焼く犠牲の匂いが祭壇の上に煙るようにせよと。／いまや以前とは打って変わった晴れの人生が／開けた

のだからな。この身は幸せと、わたしは敢えて言おう」(1154-1158行)。嬉しさはわかるが、一方でその無邪気さがわたしたちをとまどわせる。

これ以前まだアルケスティスが生還してくる前、アドメトスは生の世界に残った我が身の上を次のように述懐していた。「『見ろ、生き恥を晒している男だ。死ぬ勇気がなく／臆病風に吹かれて妻を身代りにし、／死を免れた奴だ。いったいあれが男かね。／自分は死にたくないくせに、親を／恨んでいるのだ』とまあこんな噂がいまの難儀に／追い打ちをかけてこよう。ねえみなさん、生き延びて何の／得がありましょうか。悪い評判を立てられ、ひどい仕打ちを受けるこの身には」(955-961行)。

アドメトスは自らの置かれた位置をしっかりと認識している。噂はいずれ消滅するだろう。しかし彼が「臆病風に吹かれて妻を身代りにし、死を免れた」という事実(彼はこれにきちんと反論していないから、結果として事実と認めていることになる)は消えない。そして彼の心中にもその意識は残り続ける。そうなればアルケスティスとの夫婦関係も、ことに精神面において以前とは変わるはずである。形式的には旧に復するけれども、内容の変質は余儀なくさせられるはずである。少なくともアドメトスの側の心理としては。アルケスティスは赦してくれるだろう。そのことについては何も言わぬだろう。以前と同じ良妻であり続けるだろう。しかしアドメトスのほうには、その心中にはわだかまるものがあるのではなからうか。いっそ彼女があのまま死に果てていてくれたらとの思いも、ひょっとするとあるかもしれない。死に果てていてくれたら、世間の悪評と自らの怯懦に忸怩たる思いをひたすら耐え忍べば、それで事は済むからである。だが彼女が生還した今、彼はその生還した彼女の存在の重さにも耐えていかねばならないからである。奇蹟というものは起こされて困惑する場合もある。彼にとって彼女の生還はまったく予定外のことであった。それはまずは大いなる喜びであった。いまや以前とは打って変わった晴れの人生が開けた、この身は幸せだと、彼は手放して喜ぶ。しかし一方で彼女の生還は、彼にとって苦しみでもあるのではなからうか。彼は喜ぶ前に彼女の沈黙の意味を推し測ることから始めるべきなのである。そして3日後に彼女は何と言って口を切るのか、思案してしかるべきなのである。生還をただ手放して喜ぶ無邪気な姿は、観客席の男たちの苦笑と失笑の対象となろう。

ところで4番目の劇として上演された本篇は、サテュロス劇に代わる役割を果たしたと言えるのであろうか。形式的なことはさておき、内容的にはどうであったろうか。酩酊したヘラクレスはたしかに哄笑の対象になる。先に触れたサテュロス劇の『シュレウス』(断片)にはヘラクレスが酒を飲む場面が書き込まれている(ナウク断片691)<sup>12)</sup>。酒を飲むヘラクレス像という点で両者は共通項をもつ。本篇のサテュロス劇的傾向は濃くなる、と言えるであろう。しかしあからさまな笑いを呼ぶのは、このヘラクレス登場の場だけであろう。そもそも劇の主題は身代りの死を誰に頼むかという、まことにもって鬱陶しいものである。ヘラクレス登場の場を除



けば、あとは刺々しい親子喧嘩と愁嘆場ばかりである。しかしその当事者であるアドメトスは、悲劇的人物に描かれているとは決して言えない。身代りに死んでくれる者を求めて右往左往する姿、臨終のアルケスティスを、またアルケスティス死後の己の身を嘆く姿は、そもそも今回の件が彼の自己愛に起因するものであるために、それが真摯であればあるほどその性浮薄なることが明確化してきて観る者の失笑を買わずにはいない。作者の皮肉と諷刺の意図が察知できるからである。作者エウリピデスは、素朴な民話的伝承を劇化するに際し、リアルな視点でこれを捉え直したのである。

アドメトスは身代りの死を求める正当なる理由——死への恐怖以外の説得性のある理由——を示し得なかった点で、悲劇の人物となることを逸した。むしろ失笑の対象とならざるを得なかったのである。ではアルケスティスはどうだろうか。その死の理由は何だったのか。それは第2章で引用した282行以下の彼女自身の言葉に尽きている。プラトンはそれを愛の殉死であると称揚する。彼女の行動には男尊女卑的な時代思潮の反映が、あるいは見て取れるかもしれない。また自分の死後の子供たちの行く末を案じて夫アドメトスに再婚せぬよう要求する姿は、純粋な愛の殉死からは少し距離があると感じられるかもしれない。しかしまたその一方で、彼女にはわたしたちの測り知れない彼女だけの死の理由があるのかもしれない。こんな文章がある。

お佐代さんは必ずや未来に何物かを望んでいただろう。そして瞑目するまで、美しい視線<sup>めいもく</sup>は遠い、遠い所に注がれていて、或いは何物ともしかと弁識<sup>しせん</sup>していなかったのではあるまいか<sup>13)</sup>。

これはひょっとしてアルケスティスにも適用できる一文ではあるまいか。劇中の彼女の言動に加えて最終場面での「沈黙」が、ついこんなことを思いつかせる。その一方でまたこんなことも思い浮かぶ。ひょっとしてアルケスティスは三日後沈黙したまま、あのノラのように家を出て行くのではあるまいか。観客席の心ある男たちはこう思いまどうのに、劇中のアドメトスは彼女の三日間の沈黙という現象に何の感懐もないらしい。いやむしろこの三日間は、そのあとに到来するより強い歓喜への序章のつもりでもあるらしい。いずれにせよアルケスティスを沈黙させたまま劇を終わらせる作者エウリピデスは、やはり意地が悪いと言わなければならない。

後代になってこの劇に付けられたヒュポテシス（古伝梗概）は、この劇の「(それまでの)悲劇的な調子が最後は喜びと楽しさに変わる」(第2ヒュポテシス)と言っている。だからこの劇はサテュロス劇風だと言うのであるが、喜びと楽しさを素直に感じられないわたしたちはきっと観客の中の少数派なのであろう。

註

- 1) Dale はサテュロス劇を構成する要素として次の3点をあげる。(1) 短いこと。(2) 必要とする俳優が2人であること。(3) ヘラクレスが登場すること。そして Dale は、『アルケスティス』は以上の要件を満たしているが、これはサテュロス劇的テーマをむしろ悲劇に改正修正したものと見なすべきである、作品中のヘラクレス像も戯画化されたものではなく、一個の人間として描かれていると言う。Cf. A. M. Dale, *Euripides Alcestis*, Oxford, 1966, p.xxi, xxii. Webster は上の3要素に加えて合唱隊が二つに分離し易い点をも、サテュロス劇的要素としてあげる。Cf. T. B. L. Webster, *The Tragedies of Euripides*, Methuen, 1967, p.49.
- 2) A. Nauck, *Tragicorum Graecorum Fragmenta*, Olms, Hildesheim, 1964, p.720. 訳文は逸身喜一郎／戸部順一訳(『ギリシア悲劇全集』第13巻、岩波書店、1997年)を借用させていただいた。
- 3) たとえばソポクレスの『エレクトラ』とエウリピデスの『エレクトラ』。これにはアイスキュロスの『オレストイア』も関わってくる。
- 4) 婚礼の際の犠牲を怠ったことで怒ったアルテミスがアドメトスに死をもたらししたということは考えられるが、アポドロソスの記述からは確としたことはわからない。格別な理由のない不慮の死ということでもよいのかもしれない。
- 5) 舞台上での死は悲劇の通則違反である。悲劇では登場人物が死ぬ場面は舞台裏に設定されるのがふつうである。
- 6) 鈴木照雄訳(『プラトン全集』第5巻、岩波書店)を借用させていただいた。
- 7) 女性の社会的地位の低さについては多くの証言がある。曰く、女性とは胎に植えつけられた子種を養育するだけの存在(アイスキュロス『慈しみの女神たち』658-661行)、あるいは次代の新市民を生む機械(伝デモステネス『ネアイラ弾劾』122)など。
- 8) Gounaridou は、アルケスティスの死は家の存続のための主婦の責務であったとし、エウリピデスはこの作品においてトゥキディデスが葬送演説(『歴史』巻2、45節参照)で強調した婦徳のすすめの先取りをしていると言う。Cf. Kiki Gounaridou, *Euripides and Alcestis, Speculations, Simulations, and Stories of Love in the Athenian Culture*, University Press of America, Inc., Lanham・New York・Oxford, 1998, p.34, 41.
- 9) 鯨飲についてはステシコロスの次のような詩句がある。「酒瓶三個分たっぷり入る／酒杯を取り上げ、／口に当てがい呑み干した、彼のためにとポロスが／水と和えて手渡した、その酒杯を」(ステシコロス断片181)。馬食のほうは、彼が地獄の番犬ケルベロスを求めて冥界に降ったとき、旗亭でパン16個、シチュー肉20皿、大量の大蒜、魚、籠一杯のチーズを平らげたと、アリストパネスが報告している(『蛙』549行以下)。
- 10) Silk はヘラクレスが超人間的であるがゆえに非悲劇的であると言う。Cf. M. S. Silk, *Heracles and Greek Tragedy*, In: *Greek Tragedy* ed. by I. McAuslan & P. Walcot, Oxford U.P., 1993, p.116ff. このヘラクレスの存在が本篇をサテュロス劇的風味に仕立てていると言っても過言ではない。ちなみにエウ



リピデスでヘラクレスが登場するサテュロス劇は、『ブシリス』、『エウリュステウス』、『シュレウス』の3作品である。

- 11) サテュロス劇は概ね2人の俳優で劇を構成する（『キュクロプス』は3人使用しているが）。それゆえこの場面では俳優の数が払底していて、アルケスティス役は「黙り」を使わざるを得ない。そういう事情がある。作者は冥界の穢れを祓うという宗教的理由を考案して、この「黙り」を巧く使った。Cf. D. J. Conacher, *Euripides Alceste*, Warminster, 1988, p.198. しかし同時にこれはその沈黙に新たな意味をもたせることになる。
- 12) ヘラクレスが登場するあと二つのサテュロス劇『ブシリス』と『エウリュステウス』の場合には、残存する断片にそうした場面が見えず、不明である。
- 13) 森鷗外『安井夫人』（『鷗外全集』第15巻所収、岩波書店、昭和48年、564頁）

（たんげ・かずひこ 外国語学部教授）